

「カントとヒューム」に向けて

——L・W・ベックに導かれて——

田 中 規 之

一、ヒュームとの出会い

「デイヴィッド・ヒュームの警告こそ、まさしく何年も前に初めて私を独断論のまどろみから目覚めさせ、思弁哲学の領域における私の研究に、それまでとは全く異なる方向を与えたものである。」⁽¹⁾
——カント自身の、この有名な「告白」に見られるとおり、彼の思想発展の中で、ヒューム哲学との出会いは、決定的ともいえる契機であった。

ところで、その「ヒュームとの出会い」がカントの思想発展の中でどの時期に位置づけられるかは、研究者達の間で諸説があり、例えば、一七六〇年代初頭の著作に既にヒュームの影響が読みとれるとする説⁽²⁾から、一七七〇年の『就職論文』以降にヒュームの影響を設定する説まであって一定していない。理論哲学の分野でカントがヒュームの思想を知ったのは一七五五年に独訳が刊行された『人間知性研究』を通じての事だとされる⁽³⁾。そして六〇年代のカントの代表作ともいえる『視霊者の夢』ではアイロニーを混じえながら、因果関係は理性によって洞察されず、経験からのみ決定される、という立場が示された後で天体の運動と人間の意志との関係について、『人間知性研究』第Ⅶ節第1部の記述ときわめて類似した例示表現が採られているのである⁽⁵⁾。これら二つの著作に見られる個々の言い回しまでが類似していることから、遅くとも六〇年代半ばまでにヒュームがカントに影響を与えたと推定することができるかもしれない⁽⁶⁾。しかし、これに対しては、この時期のカントの経験論風の叙述は、

当時のドイツでは広く流布していたものであり、特にヒュームの影響に帰することはできないという考え方もある。⁷⁾更に、この頃までにカントがヒュームの『人間知性研究』を読んでいたとしても、そこから受けた影響はさほど決定的なものではなく、むしろ後に七〇年代になって独訳されたヒューム批判の書物から間接的に主著である『人性論』の内容を知ることになったことの方が重要ではないか、と考える有力な解釈がある。ここでいうヒューム批判の書物とはスコットランド派の常識哲学者ビーティの著作『心理の本性と不変性について』であり、この書物は一七七二年の復活祭に独訳が出版された。実はこの年の二月二日にカントはヘルツ宛の有名な書簡の中で「形而上学の全ての秘密を解く鍵」⁽⁸⁾として、ア・プリオリな表象がいかにして対象に関わるか、という、後に『純粹理性批判』の中核をなす問題の原型ともいえる事柄を語っているのだが、注目されるのは、その問題の解釈方法として、後の「カテゴリーの形而上学的演繹」に相当すると思われるものを示唆し、執筆中の『感性と理性の限界』という著作の第一部（後の『純粹理性批判』に相当する）は、「三カ月以内に公刊される」と明言していることである。三カ月以内に公刊されるはずの著作が、それから九年以上の労苦を経てはじめて世に出るようになった経緯には、同じ年に独訳されたビーティの著作を通じてカントがはじめて知ったヒュームの『人性論』の思想内容があったのではないか。⁹⁾そして、ヘルツ宛の書簡の時点でカントは、ア・プリオリな表象がいかにして対象に関わるか、という問題が、判断表にしたがってカテゴリーを発見し分類するという「形而上学的演繹」によって比較的容易に解決できると考えていたが、今や、特殊の因果判断のみを論じた『人間知性研究』とは異なり、一般的な因果原理そのものを論じた『人性論』の内容を知るに至って、ヒュームの問題提起に答えるためには、「形而上学的演繹」では不十分だと悟り、「超越論的演繹」という困難な仕事に着手したのではないかと解釈するのである。こうした解釈を採る研究者にL・W・ベックがいる。¹⁰⁾彼の『カントとヒュームに関する論

文集』は、二人の思想家の認識論を様々な観点から論じた研究論文集だが、右に述べたような解釈に加えて、ヒュームの問題の解釈を念頭に原則論（特に「第二類推」）の論理的展開を分析しており、きわめて教えられるところの多い書物である。この小論ではカント・ヒューム両思想家の著作に即した理解を心がけつつ、ベックの解釈に導かれて、因果論の問題を考えていきたいと考える。

二、ヒュームの因果論

ここでヒュームの因果律批判をごく手みじかに概観しよう。『人性論』は、人間の心に現われる知覚を、「きわめて勢いよく激しく入り込む」⁽¹¹⁾印象と、思考する際の「勢いのない」⁽¹²⁾観念とに区分することから始まっている。両者の違いは、「力」と「生氣」の程度の差であると共に、「感じる」と思考することの違い⁽¹³⁾でもある。そしてヒュームは、両者のうち「感じる」ことがより根源的であると考えた。思考の際の観念は、それに対応する印象の「写し」にすぎず、最終的には印象に起因する。中でも最も根源的なのが「感覚の印象」である。これが彼の「人間性の学」⁽¹⁴⁾の第一原理とされる「印象先行説」なのである。

さて、印象を観念として再生するのは「記憶」と「想像」の働きによる。特に「想像」は、単純な観念を自由に分離・結合してその配置を変えることができる。ヒュームは、想像のこの自由な働きを、印象先行説に次ぐ第二原理と呼ぶが、その一方で、想像が印象に起因する観念を分離・結合するとき、やはり一定の普遍的原理があると考えた。それが心の世界における一種の「引力」に喩えられる「観念連合」⁽¹⁵⁾の原理である。そしてこうした原理として、「類似」、「近接」と並んで、想像において最も強力な結合を生じさせる関係として挙げられるのが「原因と結果」⁽¹⁶⁾である。これらの原理は、「一つの観念が自然に他の観念を導き寄せる」ようにする「穏やかな力」⁽¹⁷⁾であり、「自然的関係」とも呼ば

れる。こうして心の世界における引力として考えられた因果観念を、我々は「主観性における因果観念」ととらえておきたい。

しかし因果関係は、観念連合の原理（自然的関係）であると共に「観念の比較」による七つの「哲学的関係」の一つでもある。七つの哲学的関係は二つに大別されるが、その区分は後に「人間知性研究」で数学に代表される絶対確実な知識の対象である「観念間の関係」と自然科学的知識の対象である「事実」とに定式化される。⁽¹⁷⁾因果性は後者に算えられるが、「あらゆる事実に関する推論は、原因と結果の関係に基づく」⁽¹⁸⁾とまでいわれる重要性を与えられている。

ヒュームの因果論は、この哲学的関係としての因果関係の分析に始まり、「印象先行説」に基づいて、因果観念に対応するはずの印象を求めようとするものである。はじめ因果観念は、対象間の何らかの關係に起因するものと考えられる。そうした關係として、第一に空間時間的「近接」、第二に原因に対する結果の「継起」がある。しかしそれらよりものはるかに重要なのは、原因と結果の「必然的結合」⁽¹⁹⁾の關係である。そして、この「必然的結合」の本質を究明するために、ヒュームは次の二つの問いを提示している。

a 「その存在に始まりのあるものは、また必然的に原因をもつはずだ、と説明する理由は何か。」
b 「しかじかの特定の原因が、必然的にしかじかの特定の結果を生じなくてはならない、と我々が断定するのはなぜか。また前者から後者を導出する推論とそれを信じる信念の本性は何か。」⁽²⁰⁾
a は、一般的な因果原理に関する問いであり、b は特殊な因果關係に関わる問いであるとすることができる。このうち a についてヒュームは、一般的因果原理の普遍的必然性は、直観でも論証もなく、ただ「觀察と經驗」にのみ基づくという。従って、彼によれば、a の問いは結局、

a' 「經驗はいかにしてこのような原理（一般的因果原理）を与えるのか。」⁽²¹⁾

ということである。ところが彼はこの問いには直接答えず、a'とbの問いが結局は同じ答えになるという見通しで、bの問いの究明に移行する。そしてbの問いに答えるなかで、因果的推論は、二つの対象の「恒常的連接」の経験に基づくことが示される。しかし、恒常的連接とは、過去の経験において類似した一組の出来事の近接と継起が繰り返されたということだが、たとえその経験が無限に繰り返されたとしても、そこから「必然的結合」の観念は生じない。もし恒常的連接によって因果的推論が可能になるとすれば、そこには「未来が過去に似ているという仮定」、²²⁾「自然の斉一性」の原理が前提されていることになるが、この原理は決して証明し得ない。ヒュームは、観察と経験の対象のうちに見い出せるのは恒常的連接にすぎず、因果関係の基本となる「必然的結合」は見い出されないと考えた。因果の必然性は「対象のうちに」²³⁾はないのである。

しかしだからといって因果観念を否定するなどは、ヒュームが全く思い及ばないことであつた。ただ彼は、ここで方向を転換し、因果の必然性の起源を対象のうちに見い出すことを断念し、「心のうちに」²⁴⁾見い出そうとするのである。すなわち、因果観念に対応する印象とは、「感覚の印象」ではなく、内的な「反省の印象」であるとヒュームは考えた。我々は、類似する恒常的連接の事例を数多く観察する。するとそこから生まれた「習慣」は、「氣付かれぬくらい目立たぬ仕方」で、また「反省する」とも与えず作用して、²⁴⁾現前する対象から現前しない他の対象に移行するように、観察者の心を「限定」する。こうして習慣によって生み出される反省の印象、習慣的移行の「性向」こそが因果の必然性の本質だとヒュームは考えた。従つて彼の因果論は、因果の客観的必然性を否定し、主観的必然性のみを認めたものであつた。

三、ヒュームの問題に答えるために

ところで、因果性は自然科学の基礎概念にとどまらず、伝統的に形而上学の重要概念でもあった。従ってヒュームの因果論は形而上学に対する決定的な攻撃になると考えたカントは、その問題提起に対して自分なりの解決策を与えようとした。その際彼は、本来ア・プリオリな総合認識である形而上学の根本概念は因果概念だけではないという点に着目し、因果概念の客観的必然性に関するヒュームの問いを一般化して、ア・プリオリな総合的統一の概念（カテゴリー）の「演繹」に着手した。そしてその結果、彼は、「カテゴリーが経験から導来されたものではなく、純粹悟性から発したものであることを確認」すると共に、因果概念を含めたカテゴリーの客観的妥当性の根拠を見い出すことで、ヒュームの問いに決定的に答えたと考えたのである。

しかし、カントの「解答」は、ヒュームの問題を全面的に解決したといえるであろうか。例えば、カントは次のようにして、ヒュームに答えたと考えられるかもしれない。²⁶ — カントにおいてニュートン物理学の基本原則は「純粹自然学」と呼ばれ、「純粹数学」と共に「議論の余地のないア・プリオリな総合認識」²⁷として、その客観的妥当性が前提されている。そして純粹自然学の諸法則は、因果性その他のカテゴリーを前提とする。純粹自然学が客観的妥当性をもつ以上、因果概念の客観的妥当性も自明である——。

こうした論法は、まさしくヒュームが疑いの対象とした点（「議論の余地のないア・プリオリな総合認識」）を前提しており、本来論証の名に値しない。これがカントの「解答」だとするなら、彼の批判的立場も、ヒューム以前の合理論と同様、ヒュームの議論によって論駁されてしまうであろう。従って、「ヒュームへの解答」として有効性をもつためには、上述の論法とは反対に、ヒュームが自明だと考えたことから出発して、それが認められるためには因果概念の客観的必然性が認められなく

てはならない、という論法が採用されるべきであろう。事実「経験の第二類推」を立証する時、カントはこうした論法を採っていると思われるから、我々はこの証明のなかに「ヒュームへの解答」を探さなくてはならない。しかしその前に、まずヒュームとカントの因果法則のとらえ方の違いを知っておく必要がある。

四、ヒュームとカント

『純粹理性批判』の「超越論的方法論」には、カントがヒュームの因果論と自分の立場とを、实例をあげながら対比的に説明している箇所がある。²⁴ここで彼は、「対象に関する我々の概念の外に出ていく」性質をもつ綜合判断を、経験を介するものとア・プリオリなものに二分した後で、ヒュームの因果論がア・プリオリな綜合を認めなかった点で誤っていたと指摘している。しかし同時に、特定の因果関係は経験によってしか認識できず、決してア・プリオリには認識し得ないと考ええる点でヒュームは正しかった、とカントは述べている。例えば、

c 「日光はロウを溶かすが粘土を固める。」²⁵

という因果判断は、経験の教示なしには決して成立し得ないというのである。

ところが、例えば、以前には固まっていたロウが今では溶けてしまっているのを見れば、現実には経験の教示がなくても認識できることがあるとカントは考えた。それは、

d 「ロウが溶けるといふ出来事の前に、何か或る出来事があつたにちがいない。そして、それらは一定不変の法則に従つて、継起する。」

ということであつて、この「一定不変の法則」こそが一般原理としての因果法則を指すのである。たしかに或る出来事がいかなるものか、また特定の出来事の間因果関係があるか否かは、現実の経験

なくしては決して明確に認識できない。そこからヒュームは、「誤つて法則そのものの偶然性を推論した」⁽³⁰⁾。これに対してカントは、ア・プリオリな総合（この場合はdをア・プリオリに知ること）が可能だと考えたのだが、その際注目値するのは、この総合が「可能的経験を介して」⁽³¹⁾行なわれる、と述べている点である。たしかに現実の知覚内容が加わっていないという意味で、「可能的経験」を介する総合は、現実の経験に先立つア・プリオリな総合を意味するであらう。しかし「可能的経験」であるからには、その可能性は、単に矛盾がないという意味での「論理的可能性」とは異なり、対象への何らかの関わりをもつものと考えられるであらう。

五、知覚判断と経験判断

カントの「経験」概念の意味を説明するため引き合いに出されることの多いのが「プロレゴメナ」十八節以下の「知覚判断と経験判断の区別」の記述である。それによると「知覚判断」とは、例えば「砂糖は甘い（と感じられる）」というように、「私自身に対する二つの感覚の關係、しかも私の知覚のその時だけの状態における關係」⁽³²⁾を言い表わす。この種の判断は、「自分がいつもこの通りに感覚し、また他のすべての人も例外なく私と同じように感覚しなければならぬ」⁽³³⁾と要求するものではなく、対象との關係を全くもたない。従つて、知覚判断とは、本来その真偽が問題となり得ない主観的な判断なのである。これに対して、経験判断とは、「いつでも我々に妥当する判断」⁽³⁴⁾であり、「対象そのものの性質をも表示する」⁽³⁵⁾客観的判断である。例えば、

g「太陽が石を照らすと石は熱くなる（と私には感じられた）」。

という知覚判断は、単に観察者のその時の意識において知覚内容を連結して報告しただけであり、その真偽さえ全く問題とならない特殊な判断である。これに対して、

h 「太陽は石を熱くする」⁽³³⁾

という経験判断は、観察者のその時々意識内容を表わすものではなく、太陽・石・熱といった対象について語る客観的判断であり、その真偽は、対象との一致・不一致という経験的真理の基準に照らして経験的に判定し得るのである。そして、判断において、こうした「対象への関係」が可能となるのは、太陽・石・熱などについての知覚内容が「原因と結果」のカテゴリの下に「包摂される」ことによるのだ、とカントは考えた。それは、カテゴリこそ、「或るものを対象として認識する」⁽³⁴⁾ための概念だからである。

「経験判断」に関する言明から、カントは、「経験」を単なる主観的表象や「知覚判断」のような主観的な判断から明確に区別し、対象に関わる知識のことだと考えていたと見ることが出来る。このことが「カントのヒュームへの解答」を理解するうえで手掛かりになるように思われる。

六、ヒュームへの解答

「経験の第二類推」の証明でカントが出発点として強調したのは、いかなる覚知における表象も継時的だということであった。主観において諸々の表象は相次いで継起する。例えば目の前の河を船が下流に向って下っていくのを見たとする。私の心にはまず、河の上流の位置にある船の表象（これをS₁とする。以下同様。）が生じ、次いで下流の位置にある船の表象（S₂）が生じる。この場合船そのものの位置も、上流にある場合（S₁）と下流にいる場合（S₂）とが継時的である。しかし、家を観察するとき、まず家の下の部分を観察して、それから屋根を見たとする。その場合私の心には、まず家の下部の表象（E₁）、次いで屋根の部分の表象（E₂）が生じる。しかし先の船の場合とは異なり、家の下部（E₁）と屋根（E₂）そのものが、「それ自体継時的かどうか」という問題になる

と、もちろんこのことを肯定する人は一人もあるまい」。³⁵家の各部分は同時的存在であり、それ自体で継時的なわけではないことは明白である。このように覚知における表象がすべて継時的であるとしても、それが必ずしも客観的出来事の継起を示すとは限らないのである。

ところで、前に述べたように、ヒュームによれば因果法則の起源は、共に「恒常的連接」の關係にある二つの出来事の継起を数多く知覚していくと、心の中に知らず知らずのうちに習慣的移行の「性向」が形成されることによるのだと説明されていた。しかしこうしたヒュームの考え方が成り立つためには、まず客観的な出来事の継起が知覚されなくてはならないが、覚知のなかでいずれも継時的に生じる表象の中には（例えば家の場合のように）客観的な出来事の継起を表わすとはいえない場合がある。従ってヒュームの因果論には、彼自身は全く疑ってもみなかった前提があった。それは、我々が、覚知における単なる表象の継起とは區別して客観的な出来事の継起を知覚するという前提である。

それでは、客観的な出来事の継起を知覚する場合とその他の覚知（例えば同時的存在の継時的表象から構成される覚知）とを決定的に區別する違いは何であろうか。カントは、ここで知覚の順序に着目する。先の例でいえば、船が河を下るのを見ると、「知覚の継起する順序は一定しているのであって、覚知はこの順序に束縛されている」。³⁶従って、 $S_1 \rightarrow S_2$ のときは必ず $S_1 \rightarrow S_2$ であり、 $S_2 \rightarrow S_1$ となることはあり得ない。すなわち知覚の順序に不可逆性が認められる。これに対して家の場合は、その各部分はいずれも同時的存在であり、それらを知覚する「一定の順序というものは存在しない」。³⁷すなわち $H_1 \rightarrow H_2$ も $H_2 \rightarrow H_1$ も共に可能である。だからこの場合には、知覚の順序は可逆性をもつのである。

しかし、知覚の順序が不可逆的であるからといって、必ずしもそこから客観的な出来事の継起を認識できるとはいえない。「単なる知覚によるだけでは、相次いで現われる現象の客観的・關係は結局規

定され得ない」から、「この場合は、覚知の主観的継起を現象の客観的継起から導き出さなくてはならない」³⁹⁾とカントは明確に述べているのである。知覚の順序の不可逆性から出来事の客観的継起を推定することができるとしても、その推定が可能なのは、既に出来事が一定の法則に従って客観的に継起するということが予め考えられているからだというのがカントの考え方であると思われる。「第二類推」の証明においてカントの叙述はきわめて難解でその意味するところを把握するのは困難であるが、ここではベックの解釈に導かれてその証明構造を瞥見してみたい。

ヒュームの因果論には、我々が知覚の継起から客観的な出来事の継起を認識できるという前提があった。しかし、客観的な出来事の継起から知覚の継起とその不可逆性を導くことはできるが、たとえ知覚の順序が不可逆的であったとしても、そこからただちに客観的な出来事の継起を導くことはできない。ここでベックは二つの例を挙げている。⁴⁰⁾

まず第一に、先の家の例同様に、同時的存在でありながら、観察する順序が唯一つしかない場合には、知覚の順序が不可逆的でも、それら知覚表象の表わす各部分は同時的存在であって、客観的出来事の継起とはいえない。従って、知覚の継起から客観的出来事の継起を知り得るのは、「或る時の物の状態がそれに先立つ時の状態の反対である」⁴¹⁾ことを知覚している場合に限られる。同時的存在である可能性を排除するためである。

第二に、知覚の順序は不可逆なのに、現実の出来事の継起が知覚の順序とは反対になる場合を考えることができる。月蝕があった(△とする)のを観測してから数時間たった後で、何万光年も離れた新星の爆発(□とする)が観測されたとすると、観測における二つの知覚表象の時間的順序は不可逆的である(A→Bは不可逆)。しかし実際は新星爆発は数万年も前のことだから、二つの天体の客観的出来事の順序は、知覚の順序とは正反対なのである(B→A)。

先に河を下る船を観察する場合には、知覚の順序は不可逆的で、しかも出来事の継起とは同じ順序であった。これに対して、右の天体観測の例では、出来事の継起は、知覚とは正反対の順序になる。従って、二つの知覚表象（例えば S_{11} と S_{12} 、或いは A_{11} と B_{11} 等々）が不可逆的であり、しかも一方が先行する他方の状態の反対だと知覚していたとしても、それらの知覚表象から全く正反対の順序をもつ客観的出来事の継起を二つ考えることができる。そのうち一方が、知覚と同じ順序で継起したと解され、他方が、反対の順序で継起したと解されるのはなぜであろうか。そこには一つの前提があり、その前提とは、客観的出来事の継起が一定不変の法則に従っているということではないだろうか。ベックは述べている。「 $A_{11} \rightarrow B_{11}$ が不可逆的であるにもかかわらず、 $B_{11} \rightarrow A_{11}$ が生起していると言わせるものは、……自然法則の知識なのである。言い換えれば、 $A_{11} \rightarrow B_{11}$ が不可逆的であるということをどのように解釈するかを知るためには、少なくとも自然の因果法則が仮定されなくてはならないのである」。¹² 従って、この場合因果法則が、出来事の継起を、知覚の継起とは正反対の順序ではあるが、やはり不可逆的なものとするのである。このように、我々が知覚の継起から客観的出来事の継起と認識できるという、ヒュームが疑いもしなかった彼の因果論の前提は、実は因果法則を想定したときのみ成り立つのである。従って「経験の第二類推」の証明は、ヒュームの問題提起に対する「解答」であるといえる。それがまた経験認識がどうして可能か、に対する答えでもあった。

七、結びに代えて

ところで、因果論の問題が二人の思想家の対立点であるという伝統的観念に対して、ベックは、ヒュームの因果論が実はカントの立場にかなり近いのではないか、という注目すべき見解をも表明している。¹³ 先に二でヒュームの因果論をまとめた際に挙げた $a \cdot b$ 二つの問いのテーマとなっている原理

について、aの問いの答えとなる一般論的因果原理は、ヒュームにおいても、bの問いの答えとなる原理には還元され得ず、むしろ後者の原理が立証できないときに本領を発揮する「より高い段階の原理」だと考えられているというのである。このようなベックのヒューム解釈が『人性論』に即して正当か否かを検討することは、「第二類推」の論理的構造の更に些細な究明と共に、今後更に「カントとヒューム」をテーマに論じていく際の課題であらう。本稿はその出発点にすぎないのである。

(神奈川県立座間高等学校)

註

- (1) I. Kant, "Prolegomena, zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können." 1783 S. 260.
- (2) H. Holzhey, "Kants Erfahrungsbegriff" 1971 S. 144 ~
- (3) 坂部憲『理性の不安』一二三頁
- (4) H. Holzhey, *ibid.* S. 145 ~ N. K. Smith, *A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason*. 1918 p. XXV ~
- (5) Kant, *träume eines Geistesehers*, erläutert durch, *Träume der Metaphysik*, 1766. S. 370.
D. Hume, *An Enquiry concerning Human Understanding* (*Philosophical Essays concerning Human Understanding* 1748.) ed. by Selby Bigge L. A. Oxford. 3rd. ed. 1975.
- (6) E. Cassirer, "Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neuen Zeit." (*Wolfgang*

- Farr. [Hg.] "Hume und Kant" 1982. S. 80)
- (7) L. W. Beck. "Essays on Kant and Hume." 1978. p. 115～
 大ノミ全集ニ於『康德集』101頁
- (8) N. K. Smith, ibid. p. XXV～
- (9) L. W. Beck, "Prussian Hume and a Scottish Kant" ("Essays on Kant and Hume" 1978 p.111～129)
- (10) Hume, Treatise of Human Nature. 1739～40 (ed. by Selby Bigge L. A. Oxford 1888) p.1
- (11) Treatise. p.2
- (12) Treatise. p.6～7
- (13) Treatise. p.14
- (14) Treatise. p.10
- (15) Treatise. p.170
- (16) Enquiry. p.25
- (17) Enquiry. p.26
- (18) Enquiry. p.77
- (19) Treatise. p.78
- (20) Treatise. p.82
- (21) Treatise. p.134
- (22) Treatise. p.165
- (23) treatise. p.103～104
- (24) Prolegomena S. 260

- ③ いうした解釈の代表者はスキッパー (E. W. Schipper) である。(Beck, Essays P. 130～131を見よ) スキッパーの所論はホップ (H. G. Hoppe) によつても批判されてゐる。
- ④ Prolegomena. S. 275
- ⑤ Beck, *ibid.* 130～131p.
- ⑥ Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. I. Aufl. 1787 A764 = B792～
- ⑦ K. d. r. V. A766 = B794 c・b は ⑥ によつてもカントの原文に変更を加えてある。
- ⑧ Prolegomena. S. 299
- ⑨ Prolegomena. S. 298
- ⑩ Prolegomena. S. 301 A. な・は' g の () 内は筆者の付け加えたものである。
- ⑪ K. d. r. V. A92 = B125
- ⑫ K. d. r. V. A190 = B235
- ⑬ K. d. r. V. A192 = B237
- ⑭ K. d. r. V. A193 = B238
- ⑮ K. d. r. V. B234
- ⑯ K. d. r. V. A193 = B238
- ⑰ Beck, *ibid.* p. 149～150
- ⑱ K. d. r. V. B233
- ⑲ Beck, *ibid.* p. 150
- ⑳ Beck, *ibid.* p. 111～
- ㉑ Beck, *ibid.* p. 126